2010 年 12 月 8 日放送

漢方頻用処方解説　加味逍遙散①

大阪大学大学院医学研究科 漢方医学寄附講座 助教　　井上隆弥

（1） 主な効能

まずは加味逍遙散の主な効能についてです。保険適応エキス製剤はいくつかの製薬会社から出ており、構成生薬およびその分量はメーカーによって若干異なっていますが、おおむね体質虚弱な婦人で肩がこり、疲れやすく、精神不安などの精神神経症状、ときに便秘の傾向のある次の諸症。 冷え症、虚弱体質、月経不順、月経困難、更年期障害、血の道症となっています。これらの症状の中でも臨床で特に重要なものは、「婦人で精神不安などの精神神経症状」であるという点です。この点については、鑑別疾患の所において後述させていただきたいと思っております。

（2） 処方名の由来、処方の出典

まずは処方名の由来ですが、逍遙にはもともと「のんびりときままにぶらぶらする」といった意味があり、矢数道明先生は『漢方後世要方解説』の中で「鳥が高く飛び回るように、何物にも束縛されず心のままに楽しむ事」とおっしゃっておられます。

それでは原典を見てみましょう。加味逍遙散の原典は多くの成書において『和剤局方』となっております。確かに加味逍遙散から牡丹皮と山梔子をのぞいた逍遙散は『和剤局方』

に書かれておりますが、加味逍遙散の記載は同誌にはありません。また逍遙散に牡丹皮と山梔子を加味した方剤は薛己（せっき）の『女科撮要』（にょかさつよう）が最初であると『勿誤薬室方函口訣』（ふつごやくしつほうかんくけつ）に書かれておりますが、この処方も薄荷と生姜を欠いており、現在用いられている10種類の生薬ではありません。

結局、現在使用されている加味逍遙散が初めて記載された書物は『万病回春』の「虚労篇」であるとされています。

今回はこのうちの『和剤局方』の条文をお示しいたします。

まず『和剤局方』には「血虚労倦（ろうけん）し、五心煩熱し、肢体疼痛し、頭目昏重（こんじゅう）、心忪頬赤（しんしょうきょせき）、口燥咽乾し、発熱盗汗し、減食嗜臥（しがい）、および血熱相搏（あいう）ち、月水調（ととの）はず、臍腹脹痛し、寒熱瘧（おこり）のごとくなるを治す。また室女の血弱く陰虚して栄衛和（えいえわ）せず、痰嗽潮熱し、肌体（きたい）るいそうし、漸く骨蒸（こつじょう）となるを治す」と書かれています。

これは、血虚による疲労倦怠、手足と胸中に熱感と胸苦しさがあり、身体が痛み、頭と目がくらんで重く、動悸して頬が赤くなり、口や咽が渇いて熱が出たり寝汗があったり、食欲が低下して身体を横たえていることを好み、血と熱が絡み合って月経不順となり、腹が張って痛み、マラリアのように間欠熱のあるものを治す。また、未婚女性が貧血で、陰が虚し栄氣と衛氣の不調和から咳や痰が出たり、弛張熱が出て痩せ衰え、やがて結核にでもなろうとする者を治すという意味になります。

これらの病態を現代医学的に述べれば「消化吸収機能の低下と栄養不良状態や免疫・内分泌系の失調状態が基礎にあり、これに自律神経機能の失調が加わったもの、いわゆる慢性炎症性疾患に対する処方」と解釈できるでしょう。

（３） 生薬構成の漢方的解説

次に加味逍遙散の生薬の構成を考えてみましょう。加味逍遙散は柴胡、芍薬、蒼朮、当帰、伏苓、山梔子、牡丹皮、甘草、生姜、薄荷の10味から構成されています。個々の生薬の作用解説については時間的に無理なので総合的な効能、効果についてのみお話しさせていただきます。

この処方には１.抗炎症作用、２.胃腸機能調整作用、３.駆瘀血作用、４.精神安定作用があります。第一に「抗炎症作用」でありますが、これは柴胡、芍薬が関連します。またこの２剤には鎮静効果もあり、自律神経系への緊張緩和に作用していると考えています。次に蒼朮と伏苓による「胃腸機能調整作用」が挙げられます。この２剤は利水剤であり、下痢や浮腫を軽減させるだけでなく、抗消化性潰瘍作用、利胆作用も有しています。また「駆瘀血作用」でありますが、これはいわゆる末梢循環改善作用の事であると考えています。当帰、芍薬には補血、滋養強壮作用があり、全身を滋潤、栄養し、内分泌機能を改善させ、月経を整える作用、末梢の血流を改善させる作用があります。牡丹皮も駆瘀血作用

のある生薬ですが、同時に抗炎症作用、血小板凝集抑制作用、結合組織増殖抑制作用などの作用を有しています。最後に「精神安定作用」でありますが、これに関しては山梔子、薄荷が働き、特に不眠に効果的であると言われています。これらの生薬の総合的な薬理作用によって、この処方の効能が発揮されています。

（４） 使用目標・処方適応のポイント

使用目標・処方適応のポイントについてですが、大塚敬節先生の定められた使用目標が有名です。それによれば「血の道症と呼ばれる婦人の神経症で、疲れやすく、気分がむらで落ち着かず、物事が気にかかり、頭重、頭痛、肩こり、めまい、不眠、のぼせ、足冷、月経異常、腰痛、便秘などがあって、いつも申し分の絶えないもの」とあります。

一方で、山本巌先生も『東医雑録』のなかで、加味逍遙散について「逍遙散に山梔子、牡丹皮を加えたものである。寒くなったりあつくなったり、あつくなると汗が出る。気温の高い時は症状がひどく、気温の低い時が楽である。そして熱が出る、のぼせて顔が赤くほてる。頭痛、イライラ、不眠、怒り、肝積が強く、症状の強い時は泣いたり、わめいたりする。鼻血、吐血のような血証（出血）を呈するときは牡丹皮、山梔子を加える」と述べられています。

腹診、脈診の特徴は、腹壁は全体的に軟弱で、軽度の胸脇苦満と瘀血の圧痛及び腹部に動悸をふれ、脈は沈・細・弦というのが教科書的です。しかしこれがなければ加味逍遙散を使えないというわけではありません。

先述しました処方構成の特徴からも、婦人の不定愁訴症候群や更年期障害によく用いられてきましたが、女性に限らず、心気的傾向の不定愁訴で、いわゆる柴胡剤と駆瘀血薬の証を併せ持つ虚証に広く用いられると思います。

（５） 鑑別診断

鑑別診断をエキス製剤にしぼってお話させていただきます。

加味逍遙散と同様に神経症傾向のある患者さんに用いる漢方薬として抑肝散と柴胡加竜骨牡蛎湯、加味帰脾湯などが鑑別としてよく上げられます。

まず抑肝散と加味逍遙散を対比してみると、柴胡、伏苓、蒼朮、甘草、当帰が共通生薬として存在し、抑肝散には川芎、釣藤鈎、加味逍遙散には芍薬、薄荷、生姜、牡丹皮、山梔子が含まれていることが分かります。抑肝散は比較的鎮静作用が強い釣藤鈎が入っているのと比較して、加味逍遙散は駆瘀血薬、清熱薬がその中心であることが分かります。そのため、同じ不眠症に対しても、鎮静作用のある抑肝散は入眠障害に、抗うつ作用のある加味逍遙散は熟眠障害、早期覚醒に使用されるのだと思います。

加味帰脾湯についてですが、柴胡のほか山梔子、当帰、蒼朮、伏苓と共通する生薬が多く、これからもうつ気分、焦燥、不眠、不安などに効果的であることが理解できますが、加味帰脾湯は加味逍遙散に比べるとさらに黄耆、人参、竜眼肉などを加えることで、より

虚証の胃腸の調子がより優れない方に効果的な処方構成である事が分かります。また瘀血の兆候が無い事も特徴でしょう。

また柴胡加竜骨牡蛎湯についてですが、同じ柴胡剤であり動悸、肩こりなどの症状を目標とする点は共通点であります。この処方の特徴である竜骨、牡蛎は安神薬であり強い鎮静、抗不安作用があります。この薬方の証は加味逍遙散に比べてかなり実証であり、胸脇苦満、臍上悸などをはっきり認め、瘀血の傾向は無いというのが特徴であります。